
1 0 《ディケイド》 × 4 0 《オールライダー》

作者 B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10《デイケイド》×40《オールライダー》

【Nコード】

N6860Y

【作者名】

作者B

【あらすじ】

仮面ライダーをクロスさせるなら、デイケイドでよくね？という発想の元、「オース・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー」の主人公にデイケイドを加えてみました。基本原作通りの展開なので、目新しい展開はあまり期待しないで下さい。あと、映画を見てない人でも分かるように書いていくつもりです。

これが初投稿作品です。至らない点が多々あると思いますが、ご了承下さい。

プロローグ（前書き）

「仮面ライダーは、無敵だ！」

「正義 仮面ライダー2号」

「V3がいる限り、野望は遂げせん！」

「待ってくれ首領！貴方は人類を滅ぼすつもりか」

「見ていてくれ、オヤジ……」

「オレ、トモダチタスケル」

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！」

「君も人生に命を懸けてくれ」

「人の夢の為に生まれた。この拳……この命はその為のものだ！」

「俺は……仮面ライダー10号」

「俺は改造人間、南光太郎！！」

「この世に光がある限り、俺は何度でも蘇る！！」

「行かなきゃ……誰かが俺に助けを求めてる……！」

「みんな一生懸命生きてるんだ。それを壊しちゃいけない」

「Jパワーの戦士」

「これ以上、誰かの涙を見たくない!」

「俺は戦う!アギトの為に、人間の為に!」

「誰かを助ける為だけに変身する」

「俺には夢は無い。でも、守ることは出来る」

「戦えない、大勢の人の為に……俺は戦う!」

「鍛えてますからっ」

「俺は既に未来を掴んでいる。そしてこれからも……掴み続ける」

「俺、参上!」

「皆を守ってみせる」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ!」

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「楽して助かる命がないのは、何処も同じだな」

『『『変身!』』』

ブローグ

「あゝ、こりゃ駄目だ。一度ばらして修理しないと」

そう呟いたのは、光写真館を営んでいる”光荣次郎”だ。

「ああ、直るんならそれでいい。修理の間、代わりになるカメラを貸してくれ」

返答したのは居候の”門矢士”。どうやら、彼のカメラが壊れてしまったらしい。

「別にいいけど……レンタル代も含めて、きちんと払ってくれないと困るからね」

「わかったわかった」

「じゃあ……はい、これ代わりのカメラ。僕は修理してくるから」

そう言つて、栄次郎は士にポラロイドカメラを渡し、奥の部屋へ入っていく。

「さて、暫くはこれで我慢するか」

「我慢するか、じゃないですよ！いい加減溜まった付けを払って下さい！」

士に怒鳴っているのは”光夏美”。栄次郎の孫で、この写真館で祖父と一緒に働いている。

「わかってるって」

「もう！土君のわかったは当てにならないんですから。はあ、ユウスケも里帰りしちゃいましたし」

ユウスケとはこの写真館のもう一人の居候である。しかし、今回は登場しないので割愛する。

「お陰で口うるさいのが居ないから、最近は静かでいいな」

「もう！そんなこと言っては駄目ですよ！」

「その通りだぞ、家臣その6。私の世話をする者が一人減ってしまったのだからな」

「誰が家臣だ、誰が……ん？」

光写真館で暮らしているのは4人。では、今の声の正体は何なのか。ふと土が振り返ると――

「降臨。満を辞して」

白い鳥が立っていた。

「貴方はジーク！？」

「おい、鳥！何でお前が居るんだ！」

二人は以前面識があるが、余り良い思い出がないため、とても嫌そ

うな顔をしている。

「家臣の為にこの私自ら出向いたのだ。茶の一つくらい出せんのか、家臣その6」

「お前なあゝッ！」

「落ち着いて下さい、土君！それで……土君の為って、どういつとですか？」

夏美が質問をすると、ジークは近くの椅子に腰かけ話し始めた。

「届け物だ。ほれ、これはお前の物だろう」

そう言つて、懐からあるものを取り出す。

「これは……土君のカード？」

それは、絵柄の描かれていないカードだった。

「そうみたいだな。おい！このカード、どこで拾ったんだ？」

「ん？そうだな、あれは確か……」

土の質問に対し、ジークは回想に入る。

「1〜6ヶ月前の晴れか曇りか雨の日だったなあ」

「……つまり覚えて無いんですね」

「使えない鳥だ」

これ以上の質問は無意味だと士は思い、渡されたカードを眺める。

「そのカード、これから何が起こるのでしょうか？」

「さあな。わかっているのは、また新しい旅が始まるってことだけだ」

そう言うと、士はカードをしまう。

「今日は栄次郎は居ないのか？また私の美しい姿を写真に収めて貰おうと思ったのだが……」

ジークはそう言いながら部屋を徘徊する。

「ああ、そんなに歩き回ると——」

「ぬおっ！」

ジークの足が背景幕の紐に引っ掛かり、そのまま倒れる。
そして、背景絵が次の旅路を示すべく現れる。

「士君、これは……」

そこに映るのは、28人の戦士がズラリと並んだ姿だった。

「これは……」仮面ライダーの世界」

今再び、士——仮面ライダーディケイド——の新たな物語が始まる。

EPISODE・1 変身

「くそっ！あの鳥、後で覚えてろ！」

「でも、ここは一体何処なんでしょう？」

士と夏美は街の外れにあるアリーナの近くを歩いていた。
何故そんな所に居るかというと、それは数分前に遡る。

—
—
—

『おい、家臣その6。さっさと茶を用意しろ』

『誰がやるかつ！』

『士君落ち着いて下さ——え？地震！？』

『何だ！？この揺れは何事か！？』

『おい、落ち着け！』

『ジーク、そんなに暴れると危ないですよ！』

『うるさい！家臣その6！さっさと揺れを収めてこい！』

『ちよっ、押すな——うわっ！』

『土君！？きゃっ！』

——
——
——
そうして家から追い出され、気付いたら此処に居たというわけである。

「それにしても土君。今回は服が変わりませんでしたね」

行く先々で服装がコロコロ変わる土だが、今日は何時もの私服である。

「ああ。まあ、当然といえば当然だな」

「え？それはどういう——」

『キシャーッ！』

「「！」「」

ことですか？と言い切る前に、明らかに人間の物ではない声に遮られた。

「今のは……」

「土君！あっちです！」

夏美が声のした方を指し、二人でそこへ向かう。

「あれは一体……」

そこでは、カマキリを擬人化したような怪人と、黒を基調とした赤黄緑の上下3色の戦士が戦っていた。

「あいつは、”仮面ライダー^{オーズ}000”」

「オーズ？」

「ああ。欲望の結晶”コアメダル”を駆使して戦うライダー。3枚のメダルを組み合わせることで、ありとあらゆる状況に対応することが出来る」

士はパラロイドカメラで写真を撮りながら説明口調で話す。

「オーズ……つまり、ここはオーズの世界なんですね？」

「いや、違う」

「?どういうことですか？」

夏美の疑問に、士は出てきた写真を眺めながら答える。

「ここは仮面ライダーの世界。あらゆるライダーの物語が重なり合う場所だ。ほら、見てみる」

「え?……あつ、士君の写真が!」

渡された写真には、今戦っているオーズの姿がピンぼけせずに写っていた。

「ここは俺の世界とも重なっている。だから写真もちゃんと写る」

『トリプル スキャニングチャージ』

『セイヤーツ!』

「おっと、向こうも終わったみたいだ」

再びオーズに視線を戻すと、先ほどのカマキリ怪人——ヤミー——を倒していた。

「さて……とりあえず会ってみるか」

「そうですね」

二人はオーズに向かって歩きだそうとした。すると……

「おいお前ら、何をやっている」

金髪に白いシャツ、赤いジャケットを羽織った男に呼び止められた。

「あつ。あの、私達は——」

「お前……グリードか」

「!」

士の言葉を聞いた途端、男の目が見開いた。

「グリード？」

「ああ。数枚のコアメダルと無数のセルメダルでできている怪人だ。どうやらオーズとは協力関係にあるようだか……」

そこまで言うと、男は威嚇するような眼で士を睨む。

「貴様……一体何者——」

『ぐあっ！』

「「「！」「」」

オーズの声に振り返ると、オーズは先ほどのヤミーとはまた別の、3体のモグラの怪人に襲われていた。

「何やってんだ、映司！」

『アंक！何かこいつら変なんだ！メダルを出さない！』

「なんだと？」

アंकと呼ばれた男と映司——仮面ライダーオーズ——には、見覚えの無い怪人のようだ。しかし士と夏美は、それをよく知っていた。

「あれはイマジン？まだ居たのか」

「士君！」

「ああ」

士はベルトを腰に装着し、ライドブッカーからカードを取り出す。

「変身！」

『k a m e n r i d e r D e c a d e』

カードをベルトに入れると、電子音と共に士は仮面ライダーディケイドへ変身する。

「お前、一体……」

アंकの呟きに答えることもなく、ディケイドはオーズのところへ向かう。

「くそっ、このままじゃあ……」

オーズは、連戦に加え3対1の状況のため苦戦しているようだ。

「うわっ！離せ！」

オーズが2体のモルイマジンに捕まり、3体目が攻撃を仕掛ける。

「うわぁっ！」

そしてそのまま吹き飛ばされ、地面を転がる。

「オオオー」

モルイマジン達は、ジリジリとオーズにとどめを刺すべく近づいていく。その時――

『a t t a c k r i d e b l a s t』

電子音が鳴り響くと、銃撃音と共に弾丸がモルイマジン達に当たる。

「!?!」

突然の銃撃に、オーズは撃ち手がいるであろう方向へ振り向く。

「危なかったな」

そこには、ピンクと白のボディに十字のラインが入った仮面ライダー、ディケイドが立っていた。

「貴方は一体……」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面、ライダー?」

オーズが立ち上がると、イマジン達も立ち上がり再び戦闘体勢に入る。

「いくぞ」

『attack ride slash』

ライドブッカーが剣の形に変わり、ディケイドはそのままイメージに向かって走り出す。

「はあっ！」

ディケイドが、向かってくるイメージを同時に切りつける。イメージも反撃しようとするが、全てかわされ、もしくはガードされて攻撃が通らない。

「すごい……」

オーズからそんな言葉が漏れた。今まで多くのヤミーと戦ってきたオーズ。しかしディケイドからは、それを上回る程に戦い慣れしているように見えた。

『final attack ride D D Decade』

ディケイドがジャンプすると、イメージとの間に10枚の等身大のカードが並び、そのままイメージに向かってディメンションキックを放つ。

「はあああつ！」

「オオオーッ！」

そしてイマジンの1体に当たり、その場で爆発する。

「オオー」

「オオオー」

それを見た残りの2体は、これ以上は危険だと判断し逃走を謀る。

「あつ！待て！」

オーズは逃げたイマジンを追った。

「あいつら、何処行っただ？」

イマジンを見失ったオーズは、辺りを見回す。

「うわああ！」

すると突然、子どもの悲鳴が聞こえた。

「あっちゃか！」

オーズは悲鳴の聞こえた方へ走り出す。

「オォー」

そこには、1人の少年とそれに襲い掛かっているイマジン達が居た。

「危ない！」

すると突然少年の身体から裂け目が生まれ、イマジン達はその中へ入っていった。

「え？」

唐突な事態に一瞬思考が停止するオーズ。すると、少年が崩れるようにその場に倒れる。

「あつ！君、大丈夫！？」

少年の身を案じ、すぐさま駆け寄ろうとするオーズ。

『フアアアン！』

その時、汽笛と共に空から電車がオーズの居る方へ走ってきた。

「な、何だ！？」

電車はやがてオーズに沿うように停車し、その中から1人降りてきた。

「君は……」

青と銀のボディに鋭い赤色の目、その名も”仮面ライダーNEW電王”。時の規律を正すライダーである。

少年にパスを翳すと、イメージが飛んだ過去の時間が表れる。

「1971年11月11日か。今から40年前だな」

「こんな子どもが、何故40年前の記憶を？」

変身を解除した”野上幸太郎”と相棒のイメージ”ティ”が少年を介抱しながら話し合う。

「あの……」

そこに変身を解除した火野映司が話し掛ける。幸太郎とティも映司の方へ振り返る。

「君達は、誰？」

「あんた……誰だ？」

「おい、それはこっちの台詞だ！」

鸚鵡返しのように質問をした幸太郎に対し、苛ついたような口調で合流したアंकが返す。

「そいつは仮面ライダーオーズ。ここを守っているライダーだ。それと……お供のグリード、アंक」

すると、声と共に映司達の後ろから士が歩いてきた。

「お前は、さっきの……って誰がお供だ誰が！」

「またあんたか。今度は何の用だ？ディケイド」

「そう言うな。それに、今回は俺が先客だ」

士は以前、電王の世界で迷い込んできたジークを返しに行った際に、一度幸太郎と会っているのである。

「ディケイド？」

「ああ。俺は門矢士——仮面ライダーディケイドだ」

映司の疑問に対し自己紹介も兼ねて答える士。

「じゃあ、そっちの君は？」

「野上幸太郎、仮面ライダー電王。俺もライダーだ。あんたと同じな」

「電、王……」

突然の状況に啞然とする映司。

「イマジンは俺達が責任をもって始末する」

「後ろの奴も言ってたが、そのイマジンってのは何だ?」

「それは私が説明しよう」

アंकクの質問に対し、テデイがそれを引き継いで答える。

「イマジンは契約者の記憶を辿って過去へ飛び、自分達の都合の良
いように歴史を変える」

「で、俺達がこのデンライナーに乗って時間を飛んで、イマジンを
始末するってわけ」

テデイの説明に幸太郎が補足する。

「それじゃ、俺達はこれで」

そう言つて、幸太郎とテデイは電車——デンライナー——に乗り込
む。

「おい、映司。俺たちも行くぞ」

「え? ってちよつと待てつて!」

アंकクも二人に続き、そのさらに後を映司が追う。

「電王の世界の旅は終わったんだが……一応乗ってみるか」

そうして、士もデンライナーに乗り込んだ。

EPISODE・1 変身（後書き）

補足説明

野上幸太郎

仮面ライダー電王”野上良太郎”の孫であり、現在良太郎の代わりにNEW電王としてイマジンと戦っている。良太郎と同じ特異点である。良太郎と違いモモタロス達が憑依して変身しても、イマジン達が武器に変わってしまい憑依も解ける。

テディ

幸太郎と契約しているイマジン。幸太郎に憑依することは無いが、先端に銃口の着いた銃剣に変身し武器として戦う。

繋がる過去（前書き）

補足説明

仮面ライダーの世界

”仮面ライダーディケイド”の世界観ではライダーの世界はそれぞれが独立している。しかし今回の”レッツゴー仮面ライダー”では、1号、2号……オーズまで全て同じ世界の物語となっているため、『ライダーの物語が重なる世界』Ⅱ『仮面ライダーの世界』とした。（ぶっちゃけこじつけです）

繋がる過去

——デンライナー車内——

「はい、コーヒーどうぞ」

「わーい、やったー！」

デンライナーの客室乗務員、ナオミがコーヒーを配っていき、それを紫のイマジン——リユウタロス——が最初に受けとる。

「ありがとう。……あれ？ナオミちゃん、カップが多くない？」

次に受け取った青いイマジン——ウラタロス——が、何時もより多いカップを見てナオミに問いかける。

「これはですねえ、あちらのお客さんの分ですよ」

「お客さん？」

そう言うと、ナオミは奥に居る乗客にコーヒーを配りに行った。

「はい、どうぞ」

「あつ、ありがとうございます。」

そのコーヒーを受け取ったのは、先ほど乗り込んだ映司とアंकだ。

「ああん？何なんだお前ら」

その二人を見て、赤いイマジーン——モモタロス——が突っ掛かってきた。

「あ、いや、アंकが電王の仕事手伝えって言うから……」

「はあ？アंकだかタンクだか知らねえが、余計なお世話なんだよ！」

「お世話だー」

モモタロスの言葉をリュウタロスが煽る。

「それと……」

モモタロスはそのまま振り返る。

「なんでてめえまで居るんだよ！」

今度は、いつの間にか乗り込んでいた土に突っ掛かる。

「相変わらず騒がしい奴だ」

「ああん！？やんのかコラァ！」

「ちょっと、落ち着いて！土君も喧嘩を売らないで下さい！」

喧嘩腰の二人を仲裁する夏美。

「落ち着きなよ、先輩。それで……君たちは何で乗ってるの？別に手伝いに来たとかじゃないんでしょう？」

「ああ。そこを開けてみれば解る」

士が指したのは、デンライナーの客車の後方の扉だった。

「？どついう意味だ、そりゃ？」

疑問に思いながらも、モモタロスは扉を開けた。

「なんだこりゃああああ！！」

モモタロスの目の前には、一軒家の客間のような部屋が広がっていた。

「どつやら、デンライナーと光写真館が繋がってしまったみたいなんです」

夏が補足で説明をする。

「ふむ。よく来たな、家臣どもよ」

「あ！手羽野郎！なんでてめえまでいやがる！」

「ああ。そいつ、こつちに紛れ混んでたんだ。引き取ってくれ」

「こつちだって願ひ下げだ！」

「家臣ども、苦しゅうない」

「お前は黙ってるッ！」

「あはは。何か賑やかだな、アंक」

「映司、あの出来損ないのヤミーを黙らせる。さっきから煩くてイライラしてくる」

「誰が出来損ないだ！？誰が！」

「否定するのはヤミーの方でしょう？前半は合ってるし」

「ああ、確かに……ってどういう意味だ、亀！」

モモタロス達が騒いでいると、前の扉からオーナーが現れた。

「乗ってしまったからには、仕方ありませんねえ」

そう言いながら、持っていたステッキでモモタロスとウラタロスの取っ組み合いを止める。

「しかし、過去への介入は絶対に許しません」

今度はアंकと映司を見ながら話す。

「場合によっては、とんでもないことになってしまいます」

「そっなんですか!？」

オーナーの言葉に驚きの声を上げる映司。

「ええ。ですから、絶対にデンライナーからは……降りないで下さい」

オーナーは再び、特にアंकを諭すように、忠告をした。

——1971年11月11日——

「オォー」

「オオォー」

「見つけた！いくぞ、デディ！」

『ああ』

NEW電王に変身した幸太郎と剣に変身したデディはデンライナーから降り、見つけたイマジンと対峙する。

『幸太郎、タイムは？』

「そつだな……」

そう言いながら、2体のイメージを見る。

「12秒あれば十分だな」

『おもしろい』

「いくぞ！」

『12、11、10……』

デディのカウンtdownと共にNEW電王がイメージンへ向かっていく。

「……………あの、大丈夫だって。俺、ここから動かないから」

映司は今、モモタロス達に囲まれていた。

「あかん」

最初に口を開いたのは、黄色のイメージン——キンタロス——だ。

「オーナーから絶対に目え離すなって言われてるんや……………ZZZ」

「寝るなバカ！」

キンタロスにツッコミを入れるモモタロス。

「おい」

「お前はともかく、その金髪トサカは信用ならねえ」

「おいって」

「それを言われると……」

「おいっ！」

「うつせえ！何だ！」

さつきから呼び掛けていた土に、モモタロスが返事をする。

「アंकならもう居ないぞ」

「何言ってるんだ。此処にしっかり……ん？トサカが黒いぞ？」

「！アंकが居ない！何処行った！？」

アंकは現在右腕しか復活して居ない為、人間の肉体を借りていた。よってアंकは腕だけでも動けるのだ。

「それならほら、そこだ」

土が窓の外を指すと、そこには脱走したアंकがいた。

「あーっ！連れ戻さないと！」

「よし、行つてこい！」

モモタロスにそう言われるや否や、映司はアंकを捕まえに外へ飛び出す。

「あれ？目を離しちゃ不味いんじゃないの？」

「あーっ！しまった！いくぞお前ら！」

そのあとをモモタロス達が追う。

「土君、私達も……」

「ほつとけほつとけ。あいつらだけで十分だ」

土は完全に傍観の姿勢のようだ。

しかし、この出来事が後の大事件を生むとはこの時誰も想像すらしなかった。

「はああああ！」

NEW電王が走りながらイメージを切り裂き、イメージはそのまま爆発する。

「ふう……ん？一体足りないぞ」

一方映司は……

「見つけたぞアंक！外に出たら駄目ってオーナーに言われただろ！」

メダルを持って宙に浮いているアंकを掴みながら、文句を言う映司。

『うるさい！この時代なら、まだ他のグリードは目覚めてない。メダルは取り放題だ！』

「やっぱり、そんなことだろうと思った！さあ帰るぞ！」

逃れようとするアंकとそれを止める映司で綱引きの状態になっていた。

「オォー」

「うわっ！」

そこへ、NEW電王から逃げてきたイマジンとぶつかり盛大に転ぶ二人。

「見つけた！はああああ！」

追ってきたNEW電王が、イマジンを一刀両断する。

「オオーッ！」

そしてそのままイマジンが爆発する。

「うわああッ！」

二人は爆風で吹き飛ばされ、アंकの上に映司が落下し、思わずメダルを離す。

『映司！邪魔だ、どけ！』

「お前ら、いたぞ！」

すると向こうからモモタロス達が追いかけてきた。

『不味い！』

「僕に釣られてみる？そらっ！」

逃げようとするアंकを、ウラタロスが網で捕まえる。

『離せ！』

「もう逃げられないよ」

「大人しくしろ！」

そうして退散していく一行。

「……イーツ？」

その場に一枚のメダルを残して……

繋がる過去（後書き）

作中でアंकがヤミーを作ろうとしている場面で、「まだこの頃のアंकってヤミー作れないんじゃないの？」と思われるかもしれませんが、原作でもやっていたのでそのままにしました。

変わる運命（前書き）

今回は短めです。

変わる運命

「「「「「「.....」」」」」」

「.....ほら、アंक謝れって」

「ふんっ」

アंकと映司はモモタロス達に囲まれて、責め立てるような視線を向けられていた。

「それでは、帰りましょう」

オーナーがその場を促し、一行は映司達の時代へと戻って行った。

——現代——

「時の列車、デンライナーかぁ.....すごいなあ」

映司は走り去っていくデンライナーをみて言葉をこぼす。

「アंक！俺たち時間旅行したんだぞ.....ってどうしたんだ？」

アंकはしかめっ面をして、辺りを見ていた。

「……気に入らないな」

「？お前が何か気に入ることなんてないだろ？」

「……静か過ぎるんだよ。得体の知れない欲望が、他の欲望を抑えつけてる」

「？」

そこは、街の側とは思えないほどの静寂に包まれていた。

——デンライナー車内——

「まったく、人騒がせな野郎だったぜ！」

「まあまあ、何事もなく良かったじゃない」

苛ついているモモタロスをウラタロスが宥める。

「それはそうと……お前ら何時まで居座る気だ！」

モモタロスは、我が物顔で居座っている土に向かって怒鳴り散らす。

「しょうがないだろ。家がここにくつついてるんだ」

士はカードを整理しながら、面倒くさそうに返事をする。

「お邪魔してしまつてすいません」

「いやいや、夏美ちゃんが謝ることはないよ」

すまなそうにする夏美に優しくフォローするウラタロス。流石というべきかなんというか……。

「……」

「どうした？幸太郎」

表情の優れない幸太郎を見て、声をかけるテディ。

「ああ、いや。何でもない」

「そうか？なら良いのだが……」

しかし一向に幸太郎の表情は晴れない。

（何だ？この胸騒ぎは……嫌な予感がする）

その時、デンライナーが激しく揺れる。

「うわっ！」

「何やつ！何事やつ！？」

「うわゝ揺れるゝ！」

「ちょっと、リヨウタ押さないで！」

突然の事態に、一同はパニックを起こしていた。

「皆、落ち着け！」

「手すりか机に掴まるんだ！」

デイと幸太郎の指示により、皆身体を固定して揺れをしのぐ。そしてしばらく揺れた後、揺れは次第に収まっていった。

「ふう、もう大丈夫みてえだな」

「それにしても……今の揺れは何やったんや？」

「何か時間に大きな影響が出た、とか？」

モモタロス達は無事のようにだ。

「いてて、何なんだ一体？」

椅子から落ちた様子の士。一応無事のようにである。

「つ、士君！」

「ん？どうしたんだ？夏みかん」

「これ、見て下さい!」

夏美が指したのは、士が整理していたライダーのカードだ。

「どうしたって……………!?!」

カードを見た瞬間、驚きのあまり目を見開く士。

「どうしたんだよ?」

「なににー?」

モモタロス達も集まってくる。

「これは……………」

「ライダー達の絵が……………消えてる?」

士のカードからは、ディケイドと電王以外のライダー達の絵が消えていた。

「どういうことだ? 一体なにが……………」

「どうやら、大変なことになってしまったようですねえ」

士達が啞然としていると、奥からオーナーがやってきた。

「大変なこと?」

「どういふことですか？オーナー！」

幸太郎とテディがオーナーに質問する。すると次の瞬間、オーナーの口から衝撃的な言葉が放たれた。

「おそらく……仮面ライダーが、歴史から消滅してしまったのだでしょう」

「何だと!？」

——現代——

「Amigo? そんな……ここは——Cous Couscierだ
つたはず……」
アミーゴ クスクシエ

一度帰路に着いた映司とアंकの二人。しかし、そこにあったのは
——Cous Couscierではなく、Amigoと看板に書か
れている廃墟だった。
クスクシエ アミーゴ

「……」

アंकは遠慮せずにかずかと中へ入って行ってしまった。

「あつ、ちょっと待てよアंक！」

映司は慌ててその後を追う。

ギイッという音を鳴らしながら扉を開け、中に入っていく二人。そこには、散乱した机と瓦礫の山で埋め尽くされていた。

「比奈ちゃん、知世子さん。居ませんかー？」

映司が呼び掛けるが、二人の声は返ってこない。

「一体何がどうなってるんだ……」

思わず言葉が洩れる映司。

「！」

突然、アंकが瓦礫の奥の方へ振り向く。

「どうしたんだ？アंक」

「そこに誰か居る」

「えー！？」

すると、瓦礫の奥から一人の子供が出てきた。

「お兄さん達、誰？」

そして奥からずらすると、一人、また一人と子供が出てきた。

「君達、こんなところでどうしたの！？学校は！？」

「学校？あんなシヨツカーみたいな悪い奴らが作ったところ、行けるわけないよ！」

映司の言葉に大声で反論する子供たち。

「シヨツ、カー？」

「そうさ、シヨツカーに選ばれたエリートだけが学校に行くんだ。シヨツカーの戦闘員になる為に。40年前に日本が支配されてから、ずっと……」

子供たちからの言葉に啞然とする映司。

「どういうことだ？40年前……俺達が時間旅行から帰ってくるとき、別の世界に来てしまったとでもいうのか？」

「……お兄さん達何なの？こんなこと誰でも知ってる——」

《ピーッピーッピーッ》

子供たちの内の一人が映司達に尋ねようとしたとき、突然何処からか機械音が聞こえてきた。

《これより、国連でシヨツカーの決定が放送される。愚かな人間どもよ、テレビの前に集合しろ。繰り返し——》

「国連がシヨツカーの決定を？この世界どうなっているんだ？」

「シゲル」

「うん」

子供たちは灯りを持ち、家の奥へ歩いて行く。

「ミツル、この人達にも見せてあげたら？」

「……」

ミツルと呼ばれた少年は少し考える。

「……来いよ」

ミツルは映司達に向かって言う。どうやら連れて行くことにしたようだ。

そして一同はテレビの前に並び、電源を入れた。

敵か味方か（前書き）

今回はほとんど原作と同じです。

敵か味方か

——シヨツカー本部——

「シヨツカーの唱える未来とは、優秀な人間を選び、動植物の特性を持った怪人に改造し、世界を支配することである。いかがかな？ 諸君」

赤いマントを羽織ったシヨツカー首領が提案をする。

「ゲドンは、シヨツカーの考えに賛成だ」

「デルザー軍団も賛成しよう」

十面鬼ユム・キミルとジェネラルシャドウが同意する。

「クライシス帝国と暗黒結社ゴルゴムは反対する」

ジャーク將軍は立ち上がりながら発言した。

「我々の目的は、全人類の抹殺だ！」

その言葉に大神官ダロムも頷き、周りもざわつき始める。

「ええい！今は争っている場合ではないのだ！」

その中、鶴の一声のようにアポロガイストの声が響く。

「アポロガイストの言う通りだ」

すると、アポロガイストの後ろで横たわっていたキングダークが引き継いで話し始める。

「今我々がすべきことは、大組織同士が手を握ること。GODはシヨッカーに賛成する。」

「……」

考え込むジャーク将軍を見て、シヨッカー首領は再び口を開く。

「いかがだろう。世界征服の後のことは、また我々だけで決めればいい」

「……ならば、我々も賛成しよう」

そして、ジャーク将軍と大神官ダロムも同意した。

「今ここに、全ての組織はシヨッカーに統合され、世界の平和を乱す愚かな人間どもを排除することが決定した！」

— A m i g o —

『——以上が国連での決定です。繰り返します——』

「ふんつ。要するにシヨッカー以外の人間は全て殺すってことか」

「どうしてこんなことに……世界はどこで間違ってしまったんだ」

アंकはどこか気に入らなそうに、映司は愕然とした様子で呟く。

「そんなこと言う人初めてだよ。お兄ちゃん達、何なの？」

子供たちの一人、ナオキが問いかける。

「あ、ああ、実は俺た——」

「大変だッ！」

映司が答えようとした時、外からシゲルが大声を上げて走ってきた。

「シゲル、どうした!？」

「シヨッカーの奴らが来る！」

「なんだって!？皆、隠れるんだ！」

その時、外から扉を蹴り飛ばしながらシヨッカーの怪人達が入ってきた。

「出てこい！不穩分子の一斉検挙だ、抵抗するな！」

そう言いながら続々と中に入ってくる。

「おい、ここで間違いないんだな」

「イーッ」

「そうか」

一歩、また一歩と奥へ歩いていく怪人達。
すると、奥から映司が消火器を持って現れる。

「このっ！」

映司が怪人達に向けて消火器を吹き付ける。

「うわっ、何だ!？」

怪人達は混乱していて、うまく動けない。

「皆、第二アジトに集合だ」

「わかった」

「ほら、お兄ちゃんこっち！」

ナオキが映司に声をかけると同時に、皆外に向かって走り出す。

「くそっ、追え!逃がすなッ!」

「「「イーッ!」」」

怪人の一人が声を上げると、戦闘員達が一斉に動き出した。

「お兄ちゃん早く!」

ナオキに手を引かれ、ミツルと共に走り続ける映司は今、一本道に出ていた。

「ここまで来れば、大丈夫かな?」

少しスピードを落としながら息を整える3人。
しかし、その見通しは甘かった。

「そのこの3人、止まれ」

前方には、ショッカーの怪人と戦闘員が待ち構えていた。そして、その中には……

「シゲル!」

「このガキの命が欲しくば、大人しく投降しろ」
逃走の途中で捕まったシゲルが居た。

「ミツル……助けて……」

弱々しい声で助けを求めるシゲル。

「……………」

ミツルは無言のまま、シゲルとショッカー達を見る。

「…………いくぞ」

小さな声でそう言うと、そのまま後ろへ振り返る。

「助けないの!？」

その場を離れようとするミツルの腕を掴み、引き留める映司。

「ショッカーに齒向かって、どうせ勝てない」

「でも仲間なんだろう!？」

「…………捕まる奴が悪い。弱い奴は…………見捨てるしかないんだ」

シゲルの方を再度見ながらそう呟いたミツル。その手は、血が出るのではないかという程強く握られていた。

「ミツル…………」

「俺達はそうやって生き残ってきた! そうだろう!？」

「それは…………」

ミツルの言葉に、何も言い返せないナオキ。

「あんな悪い奴らの言いなりになってて良いの!？」

「いい分けないさッ！」

映司の腕を振り払って反論するミッル。

「だから……いつか、あいつらよりも悪くなって、強くなって……復讐してやるよ」

その言葉には、強い憎しみと怒りが込められていた。

「ミッル君、そんなの間違ってるよ！」

今度は両肩を掴み、ミッルに言い聞かせる映司。

「早くしろ！」

痺れを切らしたのか、大声を上げる怪人達。
それを見て、怪人達の前に立ちはだかる映司。

「？何のつもりだ？」

「……俺は行く。2人は早く逃げるんだ」

そう言うと、映司はベルトを腰に装着し、赤、黄、緑の3色のメダルをベルトに差し込む。

「お兄ちゃん？」

そして、右腰に着いているオースキャナーを取り、ベルトに差し込んだメダルをスキャンした。

「変身ッ！」

『タカ！トラ！バッタ！』

タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ』

歌と共に光に包まれ、映司はその姿を変えた。

「お兄ちゃん、もしかして……」

ナオキの言葉に、映司は振り向きながら答える。

「俺はオーズ。仮面ライダー^{オーズ}000だ」

そう言うと、映司——仮面ライダーオーズ——は怪人達に向かって走り出した。

「……どういうこと？仮面ライダーって、ショッカーの怪人の中で一番強い奴のことじゃないの？」

ナオキとミツルは驚愕の表情を浮かべながら、オーズの後ろ姿を見ていた。

「はあっ！」

オーズは怪人達の攻撃を避けながら、パンチやキックを繰り返す。

「ていやあっ！」

「イーッ！」

そして、シゲルを捕まえていた戦闘員を蹴り飛ばす。

「早く逃げるんだ！」

「うん！」

オーズの声を聞くと、シゲルはナオキ達の方へ走って行く。

「シゲル！」

「よし、行くぞ！」

3人は一緒になって走りだす。しかしその時――

ブルルルルルオオオン！

ブルルルルルオオオン！

3人の前方から、2つのバイクのエンジン音が聞こえてきた。

「あれは……」

「まずい、こっちだ！」

ナオキ達は横にあった建物の裏に隠れた。

ブルルルルルオオオン！

キキイイイツ！

バイクが怪人達の前で止まる。乗っていた人物は、白い仮面^{マスク}に赤い瞳、黒い体に緑のボディ、そして赤いマフラーを棚引かせ、その姿はバッタを彷彿とさせるものだった。

「仮面ライダー、1号、2号……」

誰かがそう呟いた。

「仮面ライダー？じゃあ味方なのか？」

白い手袋とブーツを着けた1号と、同じく赤いそれを着けた2号は、無言のままオーズに近づいていく。

そして――

「はあぁっ！」

「ぐぁっ！」

オーズに向かって攻撃を始めた。

「どうなっているんだ！？――ぐはぁっ！」

1号、2号の攻撃をまともにくらうオーズ。

「このライダー達は、敵なのか！？うわっ！」

そこに怪人達も加わり、形勢は一気に逆転された。止まない攻撃の嵐に、オーズは為す術も無くやられていく。

「……ほらみる。やっぱり悪の1号、2号のほうが強いんだ」

物影に隠れながらミツルは呟く。

「でも、オーズはシゲルを助けてくれたよ。オーズは味方なんだよ！」

「俺もそう思う」

ナオキの言葉に、シゲルも同意する。

「……だったらどうするんだよ。俺達じゃ、足手まといだぞ」

「それは……」

そう言いながら、3人は再びオーズの方へ視線を向ける。

「こうなったら……」

オーズはコンボチェンジしようと、メダルを取り出す。しかし――

「させるかあっ！ふんっ！」

「うわっ！」

怪人の攻撃によって、手に持っていたメダルが弾かれた。

「め、メダルが——ぐはあ！」

メダルに気を取られていたオーズに2号のパンチが決まり、そのまま吹き飛ばされる。

「あっ！オーズが！」

その光景を見て、思わず声が出るシゲル。

「……」

何か決意を込めた目でナオキがオーズの居る方へ走り出す。

「あ、おい！ナオキ！」

そして、近くに落ちていたメダルを拾い集める。

「オーズ！メダルだよ！」

ナオキはオーズに向かってメダルを投げる。オーズは身体に鞭を打ちながら立ち上がり、メダルを受け取る。

「あ、ありがとう！」

そう言うと、受け取ったメダルをベルトに差し換え、オースキャナ

ーでスキャンした。

『ライオン！トラ！チーター！』

ラタ ラタ ラトラーター！』

メダル之力により、オーズはラトラーターコンボへとコンボチェンジした。

「うおおおおおっ！」

固有技”ライオディ阿斯”により、怪人達は光に視界を奪われる。

「うわっ！くそっ！」

慌てて目を覆い隠す怪人達。

「今の内に——」

オーズはナオキ達のところへ向かう。

「皆逃げるよ！捕まって！」

「う、うん！」

そう言う、オーズは3を抱き抱えた。

「うおおおおお！」

そしてチーターレッグの俊足を使い、オーズ達はその場を離れていた。

「……もう撒いたかな？」

オーズは再びタトバコンボへと戻り、辺りを見回しながら3人と一緒に走っていた。

「お兄ちゃん、前！」

「え？」

ナオキに言われて前の方へ振り向くと、等身大もの大きさのランプが回転しながら飛んできた。

「危ない——ぐわっ！」

ナオキ達を庇ったオーズはランプに当たり、変身が解けてしまった。

「お兄ちゃん！」

ナオキ達はオーズに駆け寄る。

飛んでいたランプは地上に降り、その場で回転を始め、やがて人の形に変わった。

「お、お前は……」

映司が声を振り絞って問いかける。

「我が名はジェネラルシャドウ」

「……ジェネラル、シャドウ？」

「まだこの世に仮面ライダーが居たとはな」

そう言つと、ジェネラルシャドウはゆっくりと映司達に近づいていく。映司は3人を庇いながら後ろへと下がる。

「……皆は逃げるんだ」

「もう無理だよ！」

「これ以上やったら、お兄ちゃんも死んじゃうよ！」

弱気な声で逃げるように言うナオキ達。

「……今結構ドン底だけど、この手まだまだ届きそうだ。だから、やってみるよ」

「お兄ちゃん……」

「伸ばせる手を伸ばさなかったら、きっと死ぬほど後悔する。だから、最後まで諦めちゃ駄目だ！」

映司は正面を向きながら、そう叫んだ。

「その威勢いつまでもつかない？」

ジェネラルシャドウがそう言うと、続々とさつき撒いた戦闘員達が集まってきた。

「シャドウの生き甲斐は仮面ライダーの死。とどめだッ！やれッ！」

「……イーツ！……」

ジェネラルシャドウの合図で戦闘員達が一斉に映司達に襲いかかるうとした、その時――

フアアアアアッ！

汽笛と共に、空からデンライナーが現れた。

「あれは、デンライナー！？」

デンライナーは真っ直ぐと映司達の方へ向かってくる。

「むっ！させるか！」トランプショット”！」

ジェネラルシャドウが攻撃を繰り出すが、走ってきたデンライナーが映司達の壁となり弾かれてしまった。

そしてデンライナーが通り過ぎると、辺りには誰も居なくなっていた。

「……逃げられたか」

そう呟くと、ジェネラルシャドウは戦闘員と共にその場から去っていった。

敵か味方か（後書き）

補足説明

シヨツカー本部会議

会議には、作中に出てきた怪人達の他に「ン・ガミオ・ゼダ（クウガ）」「エルロード 水のエル（アギト）」「ケルベロス（剣^{フレイド}）」「アルビノレオイマジン（電王）」「テラー・ドーパント（W）」が居ます。

新たな運命へ

——デンライナー車内——

テディが子供達を誘導し、映司は幸太郎の肩を借りながら、客席のソファアに座る。

「ありがとう。助かったよ」

「礼には及ばない。……でも、君が見た通り歴史は大きく変わってしまった」

「あのトサカ野郎のせいだよ」

「……一体、何が起こったの？」

映司は素直に疑問をぶつける。

「私が説明しよう」

再びテディが解説に入る。

「オーナーの話によれば40年前、シヨツカーは独自に手に入れたコアメダルを改造し、シヨツカーメダルを作った」

「コアメダルを？」

「ああ。しかし、それだけでは何も起きないはずだった」

「お前らがセルメダルを落とすまではな」

説明の途中で、士が口を挟む。

「コアメダルとセルメダル。この2つがあって始めてグリードは誕生する」

「そう。そして、ショッカー戦闘員の手によりセルメダルは首領の本へ渡り、コアメダルと融合して、究極の怪人”ショッカーグリード”が誕生した」

士の補足に続くように、テディも説明を続ける。

「そして、その圧倒的なパワーの前に1号、2号は倒され、洗脳により悪の怪人となってしまった。それから40年もの間、ショッカーによる支配が続いている」

「つまり、1号、2号以降の仮面ライダーは誕生しなかったって訳」
「テディの説明の最後に、ウラタロスが付け加えた。」

「……全部、俺とアングのせいだったんだな」

「お前のせいじゃねえよ、トサカ野郎だよトサカ野郎！一発ガツンと言っつけ！」

落ち込む映司にフォロー（？）をするモモタロス。

「とにかく、俺は今から40年前に飛んで時間を修復してくる」

「！俺も行くよ！」

幸太郎の言葉に食い付く映司。

「いや、歴史を修復出来るのは電王だけだ」

「幸太郎は特異点といって、歴史の介入による映影響を受けない」

「オーズが存在出来ているのも、俺と一緒に居るからだ」

「……何だかよく分からないけど……」

「とにかく、俺達に任せとけて」

あまり理解出来てない映司に、自信に満ちた声で言う幸太郎。

「……なあ、歴史が戻ったらショッカーは居なくなるのか？」

子供達の1人、ミッルがテディに話しかける。

「ああ。正しい歴史では、仮面ライダーがショッカーを倒しているからな」

「本当か？」

「ああ」

テディの言葉を聞いたミッルとナオキは、お互いの顔を見て何か決心したように頷く。

「そういう訳だから、夏美ちゃん達も子供達と一緒に降りてね」

「あ、はい。分かりました。」

「……」

ウラタロスの言葉に、士は無言のまま、夏美は返事をした。

——現代——

デンライナーから降りた映司達は、第2アジトの近くに居た。

「シゲル君！」

すると向こうから、シゲルを呼ぶ声が聞こえてきた。

「あ、比奈さん！」

シゲルは比奈のところへ走っていく。

「比奈ちゃん！？」

知り合いの登場に驚く映司。

「え？どうして私の名前を？」

「？……あつ、もしかして歴史が変わったせいで、俺と比奈ちゃんは会ってないことに……」

「比奈さんは、このアジトで俺達の世話をしてくれてるんだ」

「私、光夏美と言います。よろしくお願いします」

「あつ、これはご丁寧に……」

呆ける映司をよそに、自己紹介をする夏美達。

「あつ！シヨツカーの飛行船だ！」

比奈と一緒に出てきた子供の1人が、飛んできた飛行船を指差す。

『我々は遂に立ち上がった。全世界に派遣されたシヨツカーの、平和を乱す愚かな人間どもを根刮ぎ排除する——』

「もうすぐ嵐がくる。頼んだぞ、幸太郎」

シヨツカーの放送を聞いて、映司は今その場に居ない仲間に望みを託す。

「シゲル君、ミツル君達は？」

「あれ？一緒に降りたはずなんだけど……」

「土君もいません！」

「！まさか……」

——デンライナー車内——

「あーっ！さっきのガキどもだッ！」

モモタロスが、さっきまで子供達が座っていたソファの方を見て叫ぶと、皆一斉に駆け寄る。すると、机の下からナオキとミツルが出てきた。

「俺達にも手伝わせてよ！」

「俺の父ちゃんはショッカーに拐われたんだ！父ちゃんを拐った憎いショッカーに復讐してやりたいんだ！」

ナオキ、ミツルの順に己の思いを口にする。

「お前え……馬鹿言ってんじゃねえ！」

そんな2人に怒鳴り散らすモモタロス。

「あーっ！手のお化けはっけーん！」

リュウタロスがソファアの後ろにあつたものを掴み上げる。

『おいっコラ！離せ！』

「うわっ！」

リュウタロスに掴まれていた右手だけのアंकが、リュウタロスの手を振り払う。

「あっ！てめえ！」

『俺はメダルの持ち主だ。メダルは返してもらおうか』

「もとはと言えばお前のせいやで！」

「そーだそーだ」

「言葉の裏には針千本。君には、何か他の目的があるんじゃない？」

ウラタロスが探るようにアंकに問いかける。

『無い。俺を信じる』

アंकは何の迷いも無く言い切った。

「今さら信じられるか！」

そう言うと、モモタロスはアंकに飛びかかる。

『ふんっ』

「ぬおっ！」

しかしアंकは余裕な様子でかわす。

「いてて……野郎ども、やっちまえ！」

モモタロスの言葉に他のメンバーも反応し、アंकを捕らえにかか
る。

『ちっ』

このままではまずいと、一旦ドアの方へ飛んでいく。

「いけませんねえ」

すると、ドアの向こうからオーナーが入ってきた。

「では、ごうしましょう」

『なあっ！』

オーナーが持ってきた鎖付きの手錠をアंकに付ける。

「モモタロス君が、アंक君のお目付け役となるのです」

オーナーはモモタロスに鎖を渡す。

『くっ！俺を犬扱いするつもりか！？』

「はい。君はまた、40年前に戻ってメダルを探すつもりだったんですよねえ？」

『はっ、悪いか！』

「よし、俺は犬は苦手だけどお前なら大丈夫なんだよ。よしお手だ！お手！」

『ふんっ』

「いでっ！……てめえ、それがご主人様に対する態度か！？コラア！」

アंकとモモタロスが取っ組み合いを始める。

「まったく、少しは静かにしろ。うるさいぞ」

「うるせえ！……ん？」

そこにはまた1人、不正乗車犯がいた。

「あーっ！てめえまだ乗ってたのか！」

さっきの声の主は士だった。

「俺も手伝ってやる。戦力は多い方が良くからな」

「余計なお世話だ！大体、特異点でもねえお前がそんなこと出来る訳ねえだろ！」

「お前こそ忘れたのか？電王の世界に行った時、一緒に過去に戻ってイマジンを倒しただろ」

「……あり？そうだった？」

そう。士はその時、自前のパスを使って過去に飛びイマジンを倒したのである。

「だが今回はメダルの回収だ。我々だけでも十分だと思うのだが……」

「さて、どうかな」

「？」

デディの言葉に対し、意味深な返事をする士。

（もしアイツが動くなら、それだけでは済まないかもしれないしな……）

「それでは、最初に行った40年前の更に1分前に、レッツラゴー」
オーナーの指示で、デンライナーは再び40年前を目指して走り出した。

——1971年11月11日——

「幸太郎、見つけたぞ」

「ああ」

幸太郎とテディは、モルイマジンとそれを倒した自分達を見つけた。

『うわあああッ！』

過去のアンクと映司が吹き飛ばされ、アンクがメダルを落とす。

「あれだな」

幸太郎は過去の自分達に見つからないように、メダルを回収する。

「よし、これで一件落着だな」

「ああ」

そして2人はデンライナーに戻っていった。

——デンライナー車内——

帰ってきた幸太郎達はカウンターに腰掛ける。

「しかし、メダル1枚のせいでこんなことになるなんてな」

幸太郎はメダルを眺めながら呟く。

『俺のメダルだ！返せ！』

「うおっ！」

急にアंकが動き出した為、モモタロスが持っていた手錠が引つ張られ、取れてしまった。

「うわっ！」

アंकが飛び込んできたせいで、幸太郎が持っていたメダルが弾かれ宙を舞う。

『よし！もらった！』

「させるかよ！」

「くそっ！」

我先にと、アंक、モモタロス、幸太郎がメダルに手を伸ばす。

『取った！』

メダルを手にしたのはアंकだ。

「てめえ、この野郎！そいつをよこせ！」

しかし、アंकは再びモモタロスに捕まる。

『離せ！』

「暴れんな！コラ！」

手を振りほどこうと左右に動きだすアंक。

『おらっ！』

「うおっ！」

パリイインッ

力いっぱい動いたせいで、アंकは窓ガラスにぶつかり、窓ガラスが割れてしまった。

『ぐっ！』

「ああーっ！メダルがあーっ！」

ぶつかった衝撃で、アंकはまたメダルを落としてしまった。

『俺のメダル！』

「おい！ちよつと待てギャーッ！」

アंकはメダルを追いかけて客車の出口から外へ飛び出し、それを掴んでいたモモタロスもつられて一緒に飛び降りてしまった。

「メダルが！」

「行くぞ！幸太郎！」

「ああ！」

2人の後を追って幸太郎とテディが飛び降りる。

「ナオキ」

「うん」

それを見て、ナオキ達も外へ飛び出す。

「……嫌な予感がするな。俺も行くか」

最後に士も、その後を追った。

伝える絆（前書き）

作者は戦闘描写が苦手です。それを踏まえて読んで下さい。

伝える絆

「さてと、メダルは何処だ？」

再び1971年の時間に来た士は、1人でメダルを探していた。どうやら、他のメンバーとははぐれてしまったようだ。

「おーい、そこの子供達。ここに銀色のメダルが落ちてなかったか？」

「見てないよ。なあ？」

「うん」

「そうか……………ん？」

士は聞き込みをしていると、白い帽子と白いシャツ、赤いネクタイをし、仮面ライダーのペンダントを付けている子供達を見つけた。

「あれは…………少年仮面ライダー隊？」

少年仮面ライダー隊。仮面ライダーをサポートする為に結成された少年少女で構成されているチームである。

「ちょうどいい。おーい！ちょっといいか？」

士は少年仮面ライダー隊に声をかける。

「？どうかしたの？おじちゃん」

「おじつ……まあいい。お前達、銀色のメダルを見なかったか？あれがショッカーの手に渡ると大変なことになる」

土の言葉を聞いた子供達は、懐疑の目を向ける。

「警戒するな。俺は味方だ」

それに気が付いたのか、懐から1号、2号のカードを取り出し、子供達に見せる。

「ねえ、このおじちゃんは大丈夫そうだよ」

「おじちゃんはやめろ……で、どうなんだ？」

「いや、見てないよ」

「俺も」

子供達は揃って見ていないらしい。

「そうか、弱ったな……」

土が困り果てていると、突然子供達の持っていたスピーカーから音声の流れてきた。

『こちらノツコ。ショッカー発見！』

「なんだって!？」

「大変だ！皆、ノッコを助けに行くぞ！」

「「「おう！」「」」

そう言うと、少年仮面ライダー隊は自転車に乗って走り出した。

「あつ！待てお前ら！」

士も慌ててその後を追った。

一方その頃……

「あつたぞ！メダルだ！」

モモタロス達は幸太郎達と合流し、転がって行くメダルを追っていた。

チャリンッ

「？」

すると、自転車に乗っていた少女の足下にメダルがぶつかった。

「何かしら？これ……」

白い帽子に白いシャツ、赤いネクタイ、そしてペンダントを着けて

いる少女はメダルを拾い上げる。

「おーい！」

その少女に幸太郎は声をかけ、皆で近付いていく。

「そのメダル、俺達のなんだ」(少年A)

「渡してくれないか？」(見た目青鬼)

『さつさとよこせ！』(赤い手のお化け)

「てめえは黙ってる！」(見た目赤鬼)

「……」

少女は自転車に股がり、一目散にその場から離れた。

「あつ！ちよつと待って！」

それを見て、慌てて後を追う幸太郎達。

「こちらノツコ。ショッカー発見！」

「こらーっ！俺達はショッカーなんかじゃねえーっ！」

そう叫びながら必死に追いかける。

ノツコがある程度幸太郎達と距離を離れた時、目の前にナオキ達が飛び出す。

「「止まれ！」」

その声に、思わずブレーキをかけるノッコ。

「そのメダル、渡して」

ナオキが手を出して言う。

「……あんた達何なのよ？」

「お前こそ、その格好何なんだよ」

ノッコの質問に質問で返すミッル。

「私は少年仮面ライダー隊よ」

「「少年仮面ライダー隊？」」

ナオキとミッルはそんな馬鹿などお互いの顔を見ながら啞然とする。それもそのはず、2人にとって仮面ライダーとは悪の改造人間なので、そうなるのは仕方のない事かもしれない。

「や、やつと追いついた……」

「あっ！あのガキども、脱走してやがったのか！」

「げっ！」

「まずっ……」

やっこのことで追いついた幸太郎達。

「「「「やあーっ！」「」」」」

「うおっ！危ねっ！」

そこへ、ノツコと同じような格好をした少年達が自転車に乗りながら幸太郎達の行く手を遮る。

「ノツコ、無事か？」

「みんな……」

どうやらノツコのピンチに駆けつけたようだ。

「まったく……ショッカーかと来て見れば、お前らか」

そこに、少年達に遅れて土がやってきた。

「あの人は？」

「あのおじちゃんは大丈夫だよ」

どうやら土は味方認定されているようだ。

「何でてめえは大丈夫なんだよ」

「その台詞は鏡を見てから言え。見た目赤鬼」

「こんの野郎……！」（見た目赤鬼）

モモタロスは一触即発の雰囲気だ。

『いいから渡せ!』

「うおっ!」

痺れを切らしたのか、アंकがモモタロスの手を払い退けてノッコに向かっていく。

「きゃっ!」

ノッコはアंकにぶつかって転び、思わずメダルを落とす。

「メダルが!」

メダルは転がっていき、黒い足にぶつかる。

「イーツ?」

全身黒タイツのショッカー戦闘員がメダルを拾う。

『それは俺のだ。よこせ』

「イーツ?……イーツ!」

『ぐあっ!』

アंकは戦闘員に殴られ、再びモモタロスのところへ戻っていく。

「へっ、殴られてやんのバーカ」

『うるさい!』

すると、向こうから他の戦闘員達と黒い軍服をきた男が1人歩いて来た。

「……まずいぞ、幸太郎。彼はブラック將軍だ」

「イーツ」

戦闘員はブラック將軍にメダルを渡す。

「おお、これは間違いなく首領が探していたメダルだ」

メダルを見ながらブラック將軍は呟く。

「そのメダル、返して貰うぜ」

「絶対にお前達に渡さない!」

士と幸太郎が子供達の前に出て、ブラック將軍と対峙する。

「ほっ、ならばどっする」

「こっするのさ」

幸太郎は取り出したベルトを腰に装着し、パスを握る。

「変身ッ」

『Strike Form』

パスをベルトに翳すと、幸太郎は仮面ライダーNEW電王へと変身する。

「「「!?」」」

その姿に子供達も驚く。

「今更驚いてんじゃねえ。こいつも仮面ライダーなんだよ」

「まっ、そういうことだ。変身ッ!」

『kamen rider Decade』

幸太郎に続き、士も変身する。

「君達は早く逃げるんだ!」

「うん!」

NEW電王は子供達に避難するように促す。

「よっしゃ、いくぜいくぜいくぜーっ!」

モモタロスを先頭に、NEW電王とディケイドはブラック將軍に向かっていった。

「はあっ！」

「ぬうつ！」

NEW電王の攻撃を華麗な剣裁きで食い止めるブラック將軍。しかし、次第にNEW電王が押し始める。

「はっ！」

「ぐっ！しまった！」

NEW電王の攻撃が手をかすめ、ブラック將軍が持っていたメダルが弾かれる。

「！今だ！」

近くに隠れていたナオキが、落ちたメダルを拾う。

「それを持って逃げろ！」

「うん！」

「ナオキ、こっちだ！」

ナオキはメダルを持って、ミッルと共に走り出す。

「くっ、追え！逃がすな！」

ブラック將軍の指示により、戦闘員達が後を追おうとする。

「おっと、お前らの相手はこの俺だ」

しかし、その前にディケイドが立ち塞がる。

（ちっ……まあいい。既に他の怪人に報告してある）

ブラック將軍は誰にも気付かれないようにほくそ笑んだ。

「急げ！」

「うん！」

ミツルとナオキは、少しでもショッカーから遠ざかる為にただひたすら走っていた。

「そこのガキ、止まれ」

しかし、行く手を怪人誰に阻まれてしまった。

「くそっ……」

「イーッ！」

「!？」

気が付いた時には、既に後ろに戦闘員が回り込み、挟み撃ちの状態になってしまった。

「もう逃げられないぞ」

怪人達はじわじわと距離を積めて行く。
すると――

「「「「おおーっ!」」」」

少年仮面ライダー隊が自転車で戦闘員達に突っ込み、不意打ちをくらった戦闘員達は混乱に陥った。

「貴方達、こっちよ!」

その隙に、ノッコは2人を近くにあった工場の中へ誘導する。

「ありがとう、助かったよ」

「ううん。気にしないで」

中に入った3人は一安心していた。
しかし――

「ふんっ!」

バリバリッ

「うわっ！」

怪人が壁を突き破って入ってきた。

「メダルを渡せ」

「いやよ！誰があんたらなんかに！」

怪人の要求を頑なに拒むノツコ。

「このガキ！」

「きゃっ！」

「！危ない！」

ナオキがノツコを庇い、怪人の攻撃を受ける。

「ぐっ……！」

「大丈夫！？」

「ナオキ！」

ナオキの手の甲に傷つけられた深い切り傷から、血が流れ出ていた。

「渡せと言っている」

ナオキ達は怪人に背を向け、出口に向かって走り出した。

「無駄だ」

「イーツ！」

しかし、既に怪人達に回り込まれていた。

「こっちよ！」

ノッコが2人の手を引き、もう一方の出口に向かが……

「イーツ！」

「イーツ！」

やはり待ち伏せており、3人は囲まれてしまった。

「イーツ！」

「……もう無理だよ、降参しよっ！」

ノッコはナオキの肩を揺さぶりながら弱気な声で言う。

「……ま………ちゃ………だっ」

ナオキは小さい声で何かを呟く。

「……ナオキ？」

「最後まで諦めちゃ駄目だ！」

ナオキは2人に、自分にも言い聞かせるように、大きな声で叫ぶ。

「今諦めたら……きっと死ぬほど後悔するからっ!」

「ナオキ……」

ナオキは、以前映司が言っていた言葉で自分を奮い起たせた。

「ならば……死ねえ!」

怪人が手を振りかざす。ナオキは思わず目を瞑った。

「待てい!」

その時、外から2つの影が走ってきた。

「「とうっ!」」

「イーツ!」

「イーツ!」

掛け声と共に、2人はショッカーの戦闘員達を蹴散らしていく。その2人は、白い仮面^{マスク}に赤い瞳、黒い体に緑のボディ、そして赤いマフラ^{マフラ}を棚引かせていた。

「仮面ライダー!」

ノッコが嬉しそうな声でその名前を呼ぶ。

「よく頑張ってくれた」

敵を蹴散らした1号、2号が3人に近寄ってくる。

「後は俺達に任せろ」

そう言うと、1号、2号はショッカーの怪人に向かって走りだした。

「1号、2号は僕達の味方なの？」

「当たり前よ！仮面ライダーは正義の味方よ！」

「正義の味方……」

「はあっ！」

「イーツ！」

2号のパンチが戦闘員達を吹き飛ばす。

「イーツ」

「イーツ」

「ふっ！はっ！」

「「イーツ!」」

戦闘員達の反撃を華麗にかわし、1号は自らの攻撃を当てる。

「「はあっ!」」

「ぬおっ!」

「ぐはっ!」

そして1号、2号の同時攻撃により、怪人達は工場の外へ弾き出される。

「くそっ、調子に乗るな!」

後を追って外に来た1号、2号に向かって攻撃を仕掛ける怪人。

「ぬうっ!」

「甘い!」

その攻撃を2号が受け止め、その隙に1号がカウンターを入れる。

「ぐあっ!」

攻撃をくらった怪人は、もう一方の怪人が居るところまで吹き飛ばされた。

「よし!」

「おう！」

1号と2号は互いに頷くと、怪人に向かってジャンプした。

「ライダーキック！」

「ライダーパンチ！」

1号、2号の必殺技が怪人達に炸裂する。

これをくらった怪人達はなんとか立ち上がるも、そのまま倒れ爆発した。

「はああああ！」

「イーツ！」

ディケイドもようやく全ての戦闘員を倒したようだ。

「さて……モモタロス達は上手くやってるのか？」

一方モモタロス達は、NEW電王と共にブラック將軍を追い詰めていた。

「諦める。お前に勝ち目は無い」

「……それはどうかな」

するとブラック將軍は、その姿をヒルカメレオンへと変えた。

「へっ、だからなんだってんだ！おらぁ！」

モモタロスが攻撃しようと近付くと、ヒルカメレオンはその姿を消した。

「何！？」

「何処へ行つた！？」

モモタロスとNEW電王は、互いに背を合わせ周りを警戒する。そして、辺りは静寂に包まれる。

「うわっ！」

「！幸太郎！」

突然衝撃がNEW電王に襲いかかる。

「くそ、出てこいこの野郎——ぐあっ——」

「モモタロス！」

姿が見えない敵を前に、2人はなすすべも無いようだ。

「電王！」

そこへ、先程1号、2号に助けられたナオキ達がやってきた。

「バカ野郎！来るんじゃないやねえ！」

「来ちゃ駄目だ！」

必死に、3人に近付かないように言うモモタロスとNEW電王。

『おい、メダルはどうした？』

「ちゃんと持ってる」

そう言つてメダルを持って見せるナオキ。

「貰った！」

「あつ！」

その隙を逃さず、ヒルカメレオンはナオキの持っていたメダルを奪い取る。

「メダルは確かに頂いた。さらばだ！」

「あつ、待て！」

NEW電王の静止を聞かず、ヒルカメレオンはその場を去っていった。

「まずいぜ……」

「これじゃあ、元の木阿弥だ」

「おい、どうした!」

そこへディケイドも合流する。

「ああ、実はメダルがショッカーの手に……」

「それなら大丈夫だ」

「!1号、2号!」

すると、1号、2号が遅れて合流する。

「話は全て、ナオキ君から聞いた」

「本物のメダルは此处にある」

2号を取り出したのは、先程ヒルカメレオンに取られたはずのメダルだった。

「どうしてそれを!?!」

「ヒルカメレオンが持っていたのは、発信機が付いた偽物だ」

「偽物?」

どうやらナオキはメダルを見せることで、ヒルカメレオンにわざと奪わせたようだ。

「成る程な。その発信機を追って行けば、ショッカーの本部が分かるってことか」

「ああ」

ディケイドの発言を肯定する1号。

「流石だな。でも、その前にこれを……」

NEW電王は2号からメダルを受け取り、宙に投げる。

「はっ！」

『あっ！お前なんてことを！』

NEW電王はメダルを撃ち抜いて破壊した。

「これで、ショッカーにメダルが渡ることとはなくなったな」

「よし、ショッカーを殲滅しに行くぞ！」

「おう！」

1号、2号と共に、仮面ライダー達はショッカーの本部を目指した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860y/>

10 《ディケイド》×40 《オールライダー》

2011年12月3日20時49分発行